

最上の子どもたちのために

未来へ紡ぐ

- ◆ 最上教育事務所指導課通信
- ◆ 令和7年10月10日
- ◆ 最上教育事務所指導課
- ◆ 第7号

第2回最上地区特別支援教育研修会 令和7年9月18日(木)

植草学園大学 佐藤 慎二 名誉教授より「どの子どももつつみこむ『特別』ではない支援教育の実際」と題してご講演いただきました。講義の合間に、障がいによる困難さの模擬体験や学級の隙間時間に活用できるミニネタを体験しながら、ユニバーサルデザイン・インクルーシブ教育と合理的配慮について知見を深めました。



講演より

- ・配慮を要する子どもには「ないと困る」支援は、どの子どもにも「あると便利で役に立つ」支援である。
- ・問題行動を叱って減らす発想ではなく、問題を起こしていない状態をほめて増やす逆転の発想!(ルール・約束は、それを守る子どもをほめるために!)
- ・安心感(守ってもらえる、助けてもらえる等) がある学級風土が合理的配慮の基盤であり、共生社会への礎となる。

～参加された先生方の声～

- ・個別の支援も大切だし、クラス全体としてのインクルーシブ教育がとても効果のあるものだとなり、即実践したいと思える講演でした。
- ・先生のテンポの良さと、体験をまじえた内容がとてもわかりやすく、学びになりました。子どもにかかわる職業の原点を改めて気づかせていただき、涙が止まりませんでした。



教職5年経験者研修最上教育事務所研修 令和7年9月16日(火)

教職5年経験者研修は、児童生徒が望ましい人間関係を築き、「生きる力」を育むことができるよう、「特別活動」に焦点を当てた研修を行っています。前半は、新庄中学校 遠藤 陽太 教諭より特別活動の授業を提供いただき、研究協議を行いました。後半は、東北福祉大学の長田 徹 教授より、「特別活動を生かした居場所づくり・絆づくり」をテーマに、演習を交えながらご講義いただきました。

遠藤 陽太 教諭(新庄中)

「学年や学級の課題解決に向けたアクションプランを立てよう」



学級活動の基盤となる、互いを認め合い、安心して言い合える「生徒同士の関係性のよさ」が随所に見られました。



講義より

- ・日本の喫緊の課題は「自己肯定感」「精神的幸福度」「社会参画意識」
→ ついつい大人が指示・命令し、失敗しないようにしていませんか?
- ・「人間関係形成」「社会参画」「自己決定」は、児童生徒の意思決定、合意形成を経て成るもの。児童生徒の自治的・自発的活動がポイント!

～研修された先生方の声～

- ・多数決以外の方法で合意形成できるようサポートし、うまくいかなかったも、まずは子どもが決めたことを実践してみたいと思います。
- ・生徒の自治的・自発的な活動を取り入れた特別活動の重要性を学ぶことができました。合意形成については、日頃の学級経営で悩んでいた点でもあったので、とても参考になりました。



第2回いじめ不登校未然防止協議会兼自立支援NW会議 令和7年9月3日(水)

今年度はいじめ不登校未然防止協議会と自立支援 NW 会議の共同開催となりました。最上管内各小・中学校等、自立支援民間団体(アベルんち、雨のちはれ、フリースペースまちかどカフェたまりば、未来人の会じぶんち、みまーも・もがみ)、各市町村教育委員会から約50名の方々に参加いただき、「不登校の児童生徒に対する支援」について、パネルディスカッション及び参加者による協議を行いました。パネルディスカッションでは、参加者が知りたい情報・伝えたい情報をやりとりすることができ、大変好評でした。また、各校生徒指導担当者同士が協議することで自校の次のアクションを考えるきっかけとなったようです。



～参加された方々の声～

- ・民間団体の行っている活動を学校の先生方等に知っていただく貴重な機会になりました。(民間)
- ・不登校児童生徒がつながれる場所が様々あることや様々な活動を行っていることを学校現場の職員があまり知らないということを痛感しました。学校側ができる“つながる”役割をきちんと果たしたいと思いました。(教職員)
- ・学校における不登校未然防止策について、いろいろなアイディアが出されていました。子供たちが集団の中で、個の考えを肯定的に共有できることが安心できる居場所づくりにつながると思いました。(行政)

第2回初任者研修授業研究会 令和7年9月11日(木)

小・中学校等及び特別支援学校初任者24名が、舟形小学校、大蔵小学校、金山中学校、舟形中学校の4会場に分かれ、授業研究会を実施しました。授業参観後の協議では、「“自分事”として捉えられる課題設定の工夫」という視点を踏まえ、校種や教科を越えて活発な意見交換が行われました。授業で見られた望ましい子どもの姿や、それを引き出した教師の手立てを協議することを通して、それぞれの先生方が所属校で担当している児童生徒をイメージしながら授業づくりについて深く考えている姿が大変印象的でした。

工藤 源騎 教諭 (舟形小)
算数「およその数の表し方と使い方を調べよう」



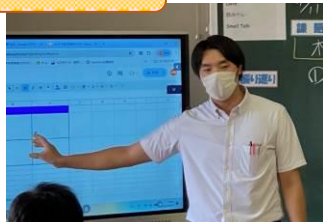
奥山 美友 教諭 (大蔵小)
算数「あまりのあるわり算」



研修当日の様子



大石 浩輝 教諭 (舟形中)
保健体育「ベースボール型球技」



柿崎 光希 教諭 (金山中)
数学「一次関数」

ノートを使用せず、ICT を使い1単元をやってみました。最初は教師である自分が慣れずあたふたする場面もあり、児童も困る場面がありましたが、使っていくうちに自分も児童も慣れていき単元の最後では、指示を短くし、児童が考える時間を長く設定することができました。学習プリント作りなどの準備は大変でしたが、この授業を経験してみてよかったと思っています。(授業者)

研修者の振り返りよい

児童生徒主体の授業とは、どういうことかを再度考え直すきっかけになった研修でした。自分の授業は、単元の最後に児童生徒がどのようになって欲しいのかという部分が曖昧だったので、今後は単元学習後の姿を明らかにした上で具体的な学習活動を練っていきたいです。(参観者)